

隠岐島五箇方言の文アクセント

神 部 宏 泰

一

隠岐島の方言状態を大観するとき、五箇地域の生活語は、一つの特殊状況を示すものとして注目される。五箇地域は「島後」西北端に位置し、他地域との境界あたりは、一帯の山地であつて、比較的孤立しがちな土地柄だと解される。この地域の生活語を、一つの方言として把握することは許されよう。この五箇方言を、文アクセントの面からながめようとするのが、本稿の目的である。

五箇方言文アクセントを特徴づける基本的な特質傾向としては、
「擡頭後起型」
「後下がり型」
「後上がり型」の三つの型を指摘することができる。以下、おのおのの型についてみていく

ことにしよう。

この報告は、次のような調査の資料に基づいている。

第一回調査	昭和32・4・1～7
第二回調査	昭和32・8・9～21
第三回調査	昭和33・8・11～21

二

「擡頭後起型」とは、

○サクラ。(小男)

さくら。

のように、文の冒頭と後方とに隆起音のあるものをいう。このよう
な文アクセントは、日常観察におこなわれている。五箇方言文アク
セント中、最も注目される特質傾向である。

「擡頭後起型」は、二種の型にみわけられる。その一つは、前掲の
「サクラ」のように、文の両端に高音が隆起するものである。

○ゴネン。(小男)

五年生。

○イカリ。(小女↓同)

だめ。

○アカメ。(青男↓同)

開かない。

以上の例のような「 」型のアクセントを、「擡頭後起A
型」とよぶことにする。

いま一つは、

○サイナラ。 パーサン。(小女↓老女)

さようなら。おばあさん。

にみられるように、文の、冒頭と中途とに高音が隆起するものであ
る。この「 」型のアクセントを、「擡頭後起B型」とよぶ
ことにする。

(1)擡頭後起A型

「擡頭後起A型」(以下、「A型」とよぶ)の「サクラ」などは、一
文が三音節によって成り立ち、その第一音節と第三音節とが隆起し
ていて、特徴はきわやかである。

○ヤレ、キタナイ、ザシキダ。(老女)

やれまあ、きたない座敷だ。

○ヨイ、ゴザンス、ズヤ。(中女↓同)

ようございますよ。

このような例になると、四音節以上からなる一文の全体に、いわゆ
る両端隆起の一つの波形が認められる。

○オッチャン。ミササッシャイ。(小男)

おじちゃん。おみせなさい。

○デキマシエン、ズヤ。(老女)

できませんよ。

これらの例にしても右と同様である。前述の「サクラ」などと
同一の、根強い傾向に発するものとみられる。

このような「A型」は、文の直接要素である話部のうえにもえが
かれて特徴を示している。

○クドレタ、ワー。(小男↓中女)

ころんだよ。

○アリゴダ、ワナ。(中男↓同)

蟻だよ。

○サイキンマデ、アッタ、ズヤ。(中男↓同)

最近まであったよ。

○エンソクワ、ゴワンショイッタエド、ノー。(老男)

遠足はごさいましたね。

この例などは、「A型」の形式が第一話部において、全文の抑揚を
特徴づけている。即ち第一話部の特徴形式を視点として、全文の抑
揚上の特徴を把握することができるのである。

○キゴンデ、マイトシ、トツテ、キチョー。(老男)

きおいたって、毎年取ってきている。

○フゲモ コータイニ スリコーッタデス ワ。(老男)

ひげも交替に剃っていましたよ。

○ソナ マー シツカニ。(中男)

ではまあお静かに。「辞去の際、居残っている人にむかっ
て」

これらの例では、問題の形式が、文の中途や最後の話部にあり、

○ム ショーデ ゲンザイマデ オルデス ワー。(青男)

無償で、現在までおりますよ。

○タイシヤヤ ニュートロー ニサンベンイキマシタ。(老女)

出雲大社や入湯△玉造温泉▽には、二、三べん行きました。

○ズンド ショッパツ ワタッタ ワケデス。(老男)

ずつと最初に△戦地へ▽渡ったわけです。

これらの例では、二話部、あるいは三話部にわたって問題の形式が
くりかえされていて、全文の抑揚が特徴づけられている。

○ンマカラ イキヤ ヒガクレッヂヤチー。(老男)

今から行けば、日が暮れるだろう。

この例の「ンマカラ イキヤ」には、二話部が認められるのである
が、これも、両聲隆起の一つの波が二話部のうえにみられるものと
してよからうかと思う。つまり、二話部のうえに「抑揚の単位」が
認められるわけである。このようにして認められる一つの波の「う
ねり」も、前述の諸例でみた、一話部単位の「うねり」の場合と同
様の効果を生み出している。

○イタニ フカニヤ ダス コトガ デキンデス ケニ。(老
男)

板にひかねば△山から▽持ち出すことができせんよ。

○タイテ シマツテ ケー ナシニ シテ ゴザンス。(老女)

燃してしまつて、ほんとに、ないことにしてごさいます。

これらの例にみられる「イタニ フカニヤ」「タイテ シマツテ」
なども、前例と同様に、二話部のうえに「抑揚の単位」を認めるこ
とができる。

(2) 據頭後起B型

「サイナラ。」などの「據頭後起B型」(以下「B型」とよぶ)

も、当、五箇方言の重要なアクセント形式である。

「サイナラ。」や、

○クワシヤイノ。(小男)

お食べなさいね。

などは、第一高音と第二高音とのあいだの低音が一音節だけであ
る。これに対して、

○ゴメンナサンセ。(中女)

ごめんください。

これなどは、第一高音と第二高音とのあいだの低音が二音節以上に
わたる。

○ヤラッシャラン カ。(老女)

おやりにならないか。

○カンガクシヤデス ワー。(老男)

漢学者ですよ。

これらの例も右のと同様である。ただ、ここで注意されるの
は、「カ」「ワー」という文末部が、第二高音に続く低音の中
に、自然のうちに包摂されていることである。これからすると、
二話部を含む全文のうえに、一つの抑揚の波かうねっているとみ
ることも許されよう。この点では、前掲の「クワシヤイノ」の

場合も同様である。

○シラヘニ ゴザツタ カ。(中女)

調査にいらっしやったか。

この例は、前例と違って、二つの高音のあいだの低音が一音節で、しかも、第二高音の後に低音の部分がながく続いている。次の諸例も同様である。

○ミナトガ ナイデスケ ネー。(老男)

港がないですからねえ。

○コツチベタノ コトバダ ワ。(青女↓同)

こちら側へこの土地のことばだわ。

○ネウチガ ゴザンシエヌ。(老女)

僱うちがございません。

以上は、一文のうえに、一つの抑揚の波が認められる場合である。

この「B型」は、一方では、文の直接要素である話部のうえにもえがかれて、二回、あるいは三回とくりかえされることが多い。

○ムカーエ エカシヤッタ。(中女)

むこうへいらっしやった。

○ヤメタケ ワカラス。(小男)

やめたからわからない。

○コトシモ ヤリマス。(中女)

今年もやります。

これらの例は、「B型」が二回くりかえされたものである。

○イワレガ アルデス ワナ。(老男)

由来がありますよね。

○アマテ クワレヌ ケー。(老女↓大勢)

あまくて食べられぬよ。

これらも同様に、問題の形式が二回くりかえされている。

以上のような形式のものは、一方からみると、冒頭の高音に始つて、以下、一音節へだてに、規則正しく隆起したものである。

○アンマリ オカシテ モノ エワレノ。(小男)

あんまりおかしくてものがいわれない。

この例は、「モノ」をはさんで、問題の形式が三回くりかえされているが、これも、一方からみると、高音が、一音節へだてに、規則正しく隆起したものである。

○エモ カカエテ イカシダ。(中女↓老男)

ようかかえて行かないのだ。

これも、右のと同様である。

○テキニモ シラスル ワケデスケ ハ。(老男)

敵にも知らせるわけですからね。〔牢裏警報を出す〕

○オバサン キラエン チョー。(中女↓青女)

おばさんは来られないって。

これらの例は、いずれも、第一、第二話部に問題の形式が含まれていて、全文の抑揚が特徴づけられている。

また、次のような場合もある。

○カケテ ヤスマッシュャンシエー。(老女)

かけておやすみなさい。

○ナラ オジヤマシマシタ。(中女↓老女)

ではおじゃましました。

これらの例は、前述の「ゴメンナサンセ。」にみられるような型が一文の中に含まれていて、その点から特徴づけられているものである。また、

○オ_ンナシ ミョ_ージデ ア_バカ_ンデスケ_ン ノ_ー。(青男)

同じ名字で、しまつがつきませんからねえ。

○ザ_シキ_オ シア_ゲニヤ オ_ラエヌ サ_イク_ダ。(老女)

座敷をしあげないと△掃除をしないと▽おられない有様だ。

これなどは、前述の、「シラベニゴザッタカ。」の形式のくりかえされたものとみることが出来る。

以上のような特異なアクセントは、五箇方言文アクセントを代表するほどの位置にあるものである。

(3) A型・B型複合形式

「A型」と「B型」との複合形式がある。

○ヒ_トツ_ダエ ワ_カラ_ヌワ。(小男)

一つさえわからないよ。

○ン_マワ バ_ーズ_デ ゴ_ザンス。(老女)

今は坊までございます。(無毛の種)

これらの複合形式は、「A型」「B型」の対比関係を見るうえからも、みのがすことのできない重要な性格を示している。「A型」と「B型」とを比較すると、「A型」である「ヒトツダエ」や「ンマワ」は、最後の音節が上がりるところに特徴があり、「B型」である「ワカラヌ」や「バースデ」は、第三音節から下がるところに特徴がある。ここに、二つの型の性格の相違は明らかである。

○ホ_トケ_サノ オ_クリ_ダス ト_コデ_ス ワ_ー。(老男)

仏さんを送りだすところですよ。〔益〕

○ナ_ラン_デ ス_ワッ_チヨ_ッテ ツ_キコ_ーリ_マシ_タ。(老女)

並んですわって△まりを▽ついでいました。

このような複合形式も、五箇方言文アクセントの重要な特徴形式といふことができよう。

以上、「擡頭後起型」をとりあげた。

三

前項に述べた「擡頭後起型」に対して注目される型の一つは、いわゆる「後下がり型」である。

○ド_ージュ_ンノ_ヨーナ コ_ター ゴ_ザラ_ヌワ。(老男)

島前のようなことはありませんよ。

○ネ_テ ゴ_ザル チョ_ー。(老男)

寝ておられるそうだ。

○ミ_ンナ イ_カシ_ヤンス カ。(中女↓同)

みんないらっしやいますか。

これらの例のように、「後下がり型」は、冒頭の高音をきっかけに、以下、低く流れるアクセントである。このようなアクセントも、五箇方言に著しくおこなわれる特徴形式である。

○ガ_イナ コ_ンデ ゴ_ザンス。(老女)

大きなことでございます。

○カ_ーテ モ_ラッ_タカ。(小男↓同)

買ってもらったか。

○ナニ シチャーチャラーカ。(中男↓同)

なにをしてるんだらうか。

このような「後下がり型」が、一文のなかに二回くりかえされる場合もある。

○カーチャントケイキテ メメノンデ コイ。(中女↓小女)

お母ちゃんところへ行って乳を飲んでこい。

この例では、前半と後半との文の二つの部分に、それぞれ、「後下がり型」を認めることができる。次の例も同様である。

○カカサンワ トー シナシタ。(老女↓中女)

お母さんは、ずっと以前に死なれた。

○ヒヤクショーノ マツリユー スルデス ワー。(青男)

百姓の祭をしますよ。

また、「後下がり型」が、話部のうえにえがかれて、二回、三回とくりかえされるものがある。

○コンヤ タッケン マツテ ゴザイ。(青男)

今夜行くから待っていて下さい。

この例がそれである。

○ナマリノ ケンキユード。(老女↓中女)

謎りの研究だ。

○ドコノ オッチャンダ。(小男)

どこのおじさんだ？

○ドコ イキタ。(老女)

どこへ行った？

これらの例も、右のと同様に、「後下がり型」が、各話部のうえにえがかれて特徴づけられている。

○ナント エンバト ワルカッタ ノー。(老女)

まあちやうど都合が悪かったねえ。

○ダイテー ジカヨーシャー モツ Chol デスケー ノー。

(老男)

たいてい自家用車を持っていますからねえ。

○ウミ イク カノ。(小男↓中男)

海へ行くかね。

これらの例では、文末部「ノー」や「カノ」が、「後下がり型」のくりかえしを受けて、自然に位置づけられている。

五箇方言には、この「後下がり型」に関連するものとして、「山口式アクセント」といわれるものがある。「山口式アクセント」は、山口県下に、周囲に絶して著しいことから、藤原与一先生によって名づけられたもので、たとえば「本ガ アリマス。」「お早う ゴザイマス。」のような抑揚を持つものを指している。つまり、「アリマス」「ゴザイマス」に、特異な後下がり抑揚波がみられるのである(藤原与一先生『日本語方言「文アクセント」の研究——特異な下降調を持つものについて——』)。A 音声の研究・第八輯(参照)。「アリマス」「ゴザイマス」は、広島県などでは、「アリマス」あるいは「アリマス」、「ゴザイマス」あるいは「ゴザイマス」となるところであって、「マス」の「マ」の部分が高く発音される。ところが、「山口式アクセント」では、「アリマス」「ゴザイマス」のように、「マス」は低音部にある。このように、初頭の高音から一気に下がり、しかも、「マス」が低音部にあるところに、「山口式アクセント」の特徴がある。

このような「山口式アクセント」が、五箇方言でも、かなりおこなわれている。次のような例がそれである。

○ガッコノ コードデ ヤリマス。(小男)

学校の講堂でやります。〔映画〕

この文は、「ヤリマス」という形式を含んでいるために、いっせうきわやかに特徴を認めることができる。が、この「ヤリマス」という特異な後下がり調も、「ガッコノ コードデ」というような、「後下がり型」の話部のくりかえしのなかにおいてなめると、そうした、「後下がり型」そのものとして、自然に位置づけられるのである。いわば、特徴のさわやかな「山口式アクセント」を、自然に包むほどに、五箇方言文アクセントの後上がりの傾向は根強いといえるのである。

○ガイナ カネオ トリマス。(老男)

たくさんの金をとります。

○スミヤキガ オリマス。(中女)

炭焼きがおります。

○オミヤサンガ アリマス。(中女↓同)

お宮があります。

○ゲタワ カイマシヨットタ。(老女)

下駄は買っていました。

これらの諸例も、右のと同様の形式に生きるものである。

○オセワニ ナリマシタ ノー。(中女↓同)

お世話になりましたねえ。

○オンキューデ オリマスダエド ノー。(老女)

恩給がついていますすけれどねえ。

これらは、「後下がり型」の文末部を伴った例である。

山口県下の「お早う コザイマス。」のように、当該話部の第二音節に高音があるものも、前述のと同様に、「後下がり型」に属するものとすることができる。

○タンビニ ケイコー シトリマス。(中男)

たびたび稽古をしています。〔闘牛〕

この文では、特徴は「シトリマス」のところにきわやかである。が、この「シトリマス」も、「タンビニ ケイコー」という「後下がり型」のなかに位置させてみると、そういう抑揚波が反覆したものとして、自然に受けとることができるのである。

○ハナシワ シリマセヌ。(女老)

話しは知りません。

○アトワ タノミマス。(青女↓老女)

後は頼みます。

また、

○ムギモ ツクリマス ワー。(老女)

麦も作りますよ。

○ニサンチモ カカリマス ワナ。(老女)

二、三日もかかりますわね。

これらも右のと同例である。

○コンベ スンダモ シレマセン ノー。(中男)

昨夜すんだかも知れませんか。

○ギューバニ オシタリ ワレ オッタリ シチヨリマシタケ

ノー。(老男)

牛馬に負わせたり、自分が負ったりしていましたからねえ。

これらは、「後下がり型」の文末部を伴った例である。
以上、「後下がり型」をとりあげた。そして、五箇方言におこなわれる「山口式アクセント」をも、「後下がり型」の根強い傾向を示すものとして、ここに位置づけたのである。

四

前述の「擡頭後起型」「後下がり型」の外に、いま一つ注目すべき型は、いわゆる「後上がり型」である。次下のような例がそれである。

○ナンカ スカス。 (小女↓中男)

なんだかすかない。

○ホントダ ジャ。 (青男↓中男)

ほんとうだよ。

これらの例は、各話部の最後音節が隆起していて注目される。

○チョット タノシム コトワ アリマ^レナ^ーネ。 (老男)

ちよっと楽しむことはありませんよね。

○マー クチ ウゴカス ナ。 (小男↓中男)

もう口を動かすな。

これらの例にも、右でみたような「後上がり型」が含まれている。

○スギヤ マツガ オーケニ ナリマスケ ネー。 (中男)

杉や松が大きくなりますからねえ。

この例に含まれている「スギヤ マツガ」は、各話部の助詞が隆起して特徴を示している。

○ソリヤ ホントニ コタエマシヨ^ッッタ ワナ。 (老女)

それは、ほんとうに困ってしまいましたわね。
○ダレニモ カレニモ ノマスル。 (老男)
誰れにもかれにも飲ませる。

○マー タイゲ^ー ナイデス ワ^ー。 (老男)

もうたぶんありませんよ。

○ホカニ ナイチャ^リ ナ。 (老女↓老男)

ほかに、ないだらうね。

これらの例も、だいたい、後上がりの傾向をになうものといふことができよう。

以上のような後上がりの傾向は、前述の「擡頭後起」「後下がり」の傾向に比較すると、いくらか弱いようである。が、これも、みのがし得ない特徴形式と思われる。

「後上がり型」に関連して、藤原与一先生の命名された「中止的抑揚」がおこなわれている。「中止的抑揚」とは、

○ヒヤクシ^コローノ コンデー ショ^バイワ セズ ノ^ー。 (老男)

百姓のことだから商売はしないしねえ。

の、「コンデー」にみられるように、文の中途にあつて、あたかも、そこで、文をひとくぎりさすかのような、上がり調子の抑揚を指している。このような「中止的抑揚」も、全文の抑揚を把握するうえに、重要な視点となる。この抑揚は、後上がり傾向に類するものとみてよい。

○タツタ^ク タイケガ フヂ^ニナ タメ^ニ……。 (老男)

ただ食糧が不自由なために……。

この例では、「後上がり型」の反覆されるなかに、「中止的抑揚」

がむりなく位置づけられている。とはいえ、なかでも、「中止的抑揚」が光って、特徴をきわだたしているのである。

○ヨルワー アガーッテ クルンダ ケー。(小男)

夜はあがつてくるんだから。「海にな」

○ローキョクノー マネガタ デス ノー。(老男)

浪曲の真似師ですなえ。

○ンマゴラー ケー トレマシエヌ。(老女)

今頃はほんとうにとれません。

○デントーガー シローワクネンニ ツイタトモツチヨーマス
ガー。(老男)

電燈が昭和九年にいったと思っっていますよ。

これらの例では、「中止的抑揚」が、前述の「擡頭後起型」を形づくる、一つの要素ともなっている。

○ハタケモー タヨリー モット セマイ コトモゴザンスマ
ートモイマスガ ノー。(老女)

畠も田より、さらにせまいということもありますまいと思
いますがねえ。

この例では、問題の抑揚が二回くりかえされている。

以上、みられるように、「中止的抑揚」は後上がり傾向をなすものである。いしかえると、特異性を持つ「中止的抑揚」が注意されればされるほど、当五箇方言の後上がり傾向の深さを思わな
いわけにはいかないのである。

五

以上、五箇方言文アクセントの基本的な特質傾向として、「擡頭

後起型」「後下がり型」「後上がり型」の三つの型をとりあげてきた。このなかで、最も五箇方言色の豊かなものは「擡頭後起型」である。

「擡頭後起型」は、すでにみたように、全く特異なアクセントであつて、鳥後の南部、西郷地区などではみることのできないものである。この型の成立事情の考察は興味あることであるが、それには、まず、当五箇地域の方言地盤の解明が必要であろう。しかし、このことは決して容易ではない。全隠岐島方言の内部事情はそうとうに複雑のようであつて、簡単に五箇地域の方言地盤を論じるわけにはいかない。ただ、文アクセントについて、五箇方言の性格を探らうとするとき、注目されてくるのが、「擡頭後起型」であり、そして「後下がり型」「後上がり型」である。

「後下がり型」のアクセントは、だいたい反中国的なものである。「反中国的」とはいったが、これは、広島県、岡山県、あるいは鳥取県などにおこなわれる文アクセントを、中国アクセントの主流にみたてた意味でのことである。というのは、山口県などは、同じ中国圏内に属しながら、例の特異な後下がり調である「山口市アクセント」を強くみせているからである。このことは、一方からいうと、五箇方言文アクセントの「後下がり型」は、山口県下におこなわれる「山口市アクセント」と、相関連させて考えることができるということである。ともあれ、この「後下がり型」のアクセントが、五箇方言に著しいという事実を、方言地盤として、どの程度にか「反中国的」なものを持っているということではなからうか。この「後下がり型」の「反中国的性格」に対して、「後上がり型」のアクセントは、だいたい、いわゆる中国的だといえよう。

転じて、島後南部の西郷地区をみると、後上がりの傾向が優勢である。それは、たとえば、次下のような状態である。

○ミサスラ センケン ミサツジャン・ナ。(中女)

みさせはしないからみなさんな。

○イキタテテ ツマラン。(小男)

行ってもつまらない。

○ヤツパリ トコロデ ナケニヤ オモシロイ ガンジガ
イデスワ。(老男)

やっぱり、地元でなくては、おもしろい感じがしないですわ
い。「闘牛」

○シンバイ シチョッタニー、ドガダエ ナカッタテテ ヨロ
コソデヨッタ。(青女↓中男)

心配していたが、何でもなかったといつて喜んでた。

○コンタチ コンタチ ミサツシャイナ。(中男)

君達、君達、ごらんなさいね。

○ナオラザッタラ シカダ ナイダケ。(青女↓中男)

なおらなかつたら、しかたがないのよ。

○イマゴロワ オソロシ トコガ ナイデス ケニ。(老男)

今頃は恐しいところがありませんよ。

注意されることは、ここに掲げた例のほとんどが、「擡頭後起型」の頭の高まりが消えた状態のもの、ほぼ、一致しているというところである。これからしても、五箇方言の特異な「擡頭後起型」には、「中国的アクセント」の「後上がり型」の内在を認めることができる。

この「中国的アクセント」は、島後南部から中部にかけて強い存

立を示し、そのまま、ゆるい傾斜を示しながら、北部の五箇方言に及ぶのである。

以上のようにみてくると、五箇方言文アクセントを端的に代表する「擡頭後起型」には、「中国的アクセント」の「後上がり型」が内在し、これに、「反中国的アクセント」の「後下がり型」が関係していることが出来るかと思う。

——広島大学大学院学生——

本稿は、藤原与一先生の御指導を賜ったものであります。あつく御礼申しあげます。

なお、臨地調査にあたっては、島根大学の広戸尊氏、隠岐高校の安部勝氏をはじめ、現地の皆様方から、多大の御好意をいただきました。記して感謝の意を表します。